



## [制作記録]

「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」の  
学術的復元模写制作について<sup>1</sup>Research on Academic and Scientific Restoration of “National Treasure.  
Nissou-Kan, the Wooden Doors Painting (west side) of Byodo-in Hoo-do”荒木恵信  
ARAKI Keishin

## はじめに

平成27年10月3日、待望のニュースが新聞紙面を飾った。平等院鳳凰堂の新しい西面扉が完成し、平等院のミュージアム「鳳翔館」において一般公開がはじまったのである（図3参照）。この新造の扉は平等院の皆様をはじめ、関係者の方々の叡智の結晶である。この英断と偉業に敬意を表すとともに、微力ながら筆者も日想観図（以下、研究対象作品）（図1参照）<sup>2</sup>の学術的復元模写で扉の新造に参加させていただいたことに深く感謝しているところである。それでは元々あったオリジナルの西面扉はと言えば、既にこの時点で鳳凰堂から取り外され、保存環境の整った収蔵庫で保管されているのである。このオリジナルの西面扉は、中堂と尾廊とを仕切る観音開きの扉として鳳凰堂創建当初の1053年に製造された。扉を閉めた状態で中堂側になる面に研究対象作品は描かれており（図4参照）、その制作年は扉の製造と同じと考えられている。それから2013年までの96年間もの長きにわたりこの扉は堂内に取り付けられたまま日常的に開閉され、また研究対象作品は荘厳のひとつとして阿弥陀如来像の鎮座する空間を構成してきた。堂内の扉・扉絵の中で最も長くその役目を務めてきたのである。そのため、もしも収蔵庫での保存がなされずこのまま使用され続けたならば、経年変化やこれに伴う絵具層の剥落などにより研究対象作品が消失する可能性も考えられた。現在、オリジナルの西面扉と研究対象作品をこれまで

と同じように堂内で調査鑑賞することはできなくなったが、原本を消失させることなく次世代へと継承することは、文化財保存の観点から学術的な復元研究を実施している筆者にとっても大いに願っていたことである。

本研究で称する学術的復元模写とは、原本に包含される様々な文化価値を現在できる限りの方法で調査解析し、この客観的資料をもとに学術的な根拠をもって制作した復元模写作品のことである。学術的復元模写では文章や写真画像などで再現できない情報、例えばそのもの自体から感じられる質感や量感、素材感、視覚的体験なども大切な文化価値として捉え、これらも含めて後世へと伝達する文化財保存の有効な方法のひとつである。消失の懸念のある文化財や、鑑賞が困難な文化財へは特に期待される保存のあり方といえる。学術的復元模写の信頼性をより高めるためには原本の現状を詳細に調査し、その結果を踏まえて現段階でわかる限りにおいて研究対象作品と同様の寸法、同種の材料及び技法で制作する。また、原本に描かれている図様や色彩に関する現時点での研究成果を明確に示す目的から原本の制作当初を想定する。

本論では研究対象作品の学術的復元模写制作の工程を図版とともに記述する。学術的復元模写の制作に際して研究対象作品を考察する視点には、描かれているモチーフや場所、季節など作品の主題や内容に関する点や、制作の時代性や来歴など歴史的背景に関する点など様々あるが、ここでは材料や技法、

絵画組成に関する点を中心とする。主題や図様の復元などに関しては別に記載した拙稿を参照されたい<sup>3</sup>。また、本稿だけでは制作の全工程を記述することはかなわないため、ここでは「研究対象作品の基底材の現状と考察」、「学術的復元模写の基底材製作」をまず取り上げることとする。

## 研究対象作品の基底材の現状と考察

西面扉は堂内他の扉や建築部材など同様に檜で造られている。つまり研究対象作品の基底材も檜板である(図2参照)。前述したように西面扉は観音開きの構造であり、その左右どちらの扉も材の組み方は同じである。幅約25cm、長さ約230cmの板目の檜板を縦に4枚継ぎ、この周囲に幅約13cmの框が取り付けられている。框の表面には幅約6cmの押縁が取り付けられているため、現状で確認できる框の幅は約7cmである。左右2枚の扉にわたる画面は、たいへん広大といえる。

それぞれの檜板には原木を剥いだ際に生じたと考えられる大きく緩やかな起伏が確認できる。原木を剥いだ後の表面は槍鉋によって整えられたと考えられる。これは、絵具層が剥落して木地が露出している箇所に確認できる幅約1cm、長さ約30~40cmの縦長の規則性をもった削り跡を当時の製材技術と照合し、検討した結果である。また、檜板と檜板とが継がれて接する箇所の表面には、幅約1cm、深さ約0.3cmのV字の溝が確認でき、檜板が継がれる前に面取りを施されていたと考えられる(図5参照)。この溝には詰めて固められた木屎漆のようなものを確認できる箇所が多くある(図6参照)。この詰物の表面には絵具層が形成されており、そこには制作当初のものと考えられる図様の一部も確認できる。このことから経年変化のために檜材が上下左右へとずれてV字の溝に大きな隙間が生じたり、詰物自体の接着力が低下したりするなどして欠損した箇所も少なくないが、制作当初は全ての溝に詰められていたと考えられる。

画面には扉の機能に伴う八双金具や、鍵に関わる

棧や金具が取り付けられている。これらを取り外しでの調査は今回不可能であったため、これに隠されている画面に図様が存在するか否かは現時点で明確ではない。図様の有無によって扉の製作手順や絵画の制作方法の解明に繋がると考えられ、今後の課題といえる。本研究では八双金具で隠れている箇所にも図様があるものと仮定して制作することとした。一方、この他にも和釘や釘孔、孔を塞ぐ白色の埋め物が露出している箇所、大小さまざまな引っ掻いたような傷跡、経年変化によると考えられる細かな凹凸など、研究対象作品の完成時には画面になかったと考えられる要素が多く確認できる。これらの要素は学術的復元模写には含まない。

## 学術的復元模写の基底材製作

本研究では、時間的な制約などによる理由から広大な画面を全て復元することは控え、研究対象箇所を設定することとした<sup>4</sup>。ここには日想観図の主題となる日輪や家屋など主要なモチーフが描かれており、幸いなことに図様の剥落なども比較的少ない。

基底材となる檜板は学術的復元模写自体の保存を考慮して板目の材よりも収縮率が低い正目の材で、ヤニなどによる画面への悪影響を最小限に防ぐためによく枯れた材を厳選した。

各材の寸法に関して(図7参照)、学術的復元模写の完成時にはその周囲4辺に研究対象作品の押縁を想定した幅の額縁を取り付けることとしたため、この額縁が取り付けられる箇所の材はその掛りの分だけ寸法を大きくした。これ以外は研究対象作品とおよそ同寸である。しかし前述の檜板と檜板との継目に生じた隙間を学術的復元模写では解消するため、檜材を組んだ後の各基底材の幅は研究対象作品よりも約1cm狭くなる。

研究対象作品に確認した、原木を剥いだ際にできたと考えられる緩やかな凹凸は再現しないこととした。その起伏の測定調査は国宝である研究対象作品の安全性確保の観点から非常に困難であることと、これに関して報告書などに明記することで本研究の



図1 日想観図 全図 現状カラー画像

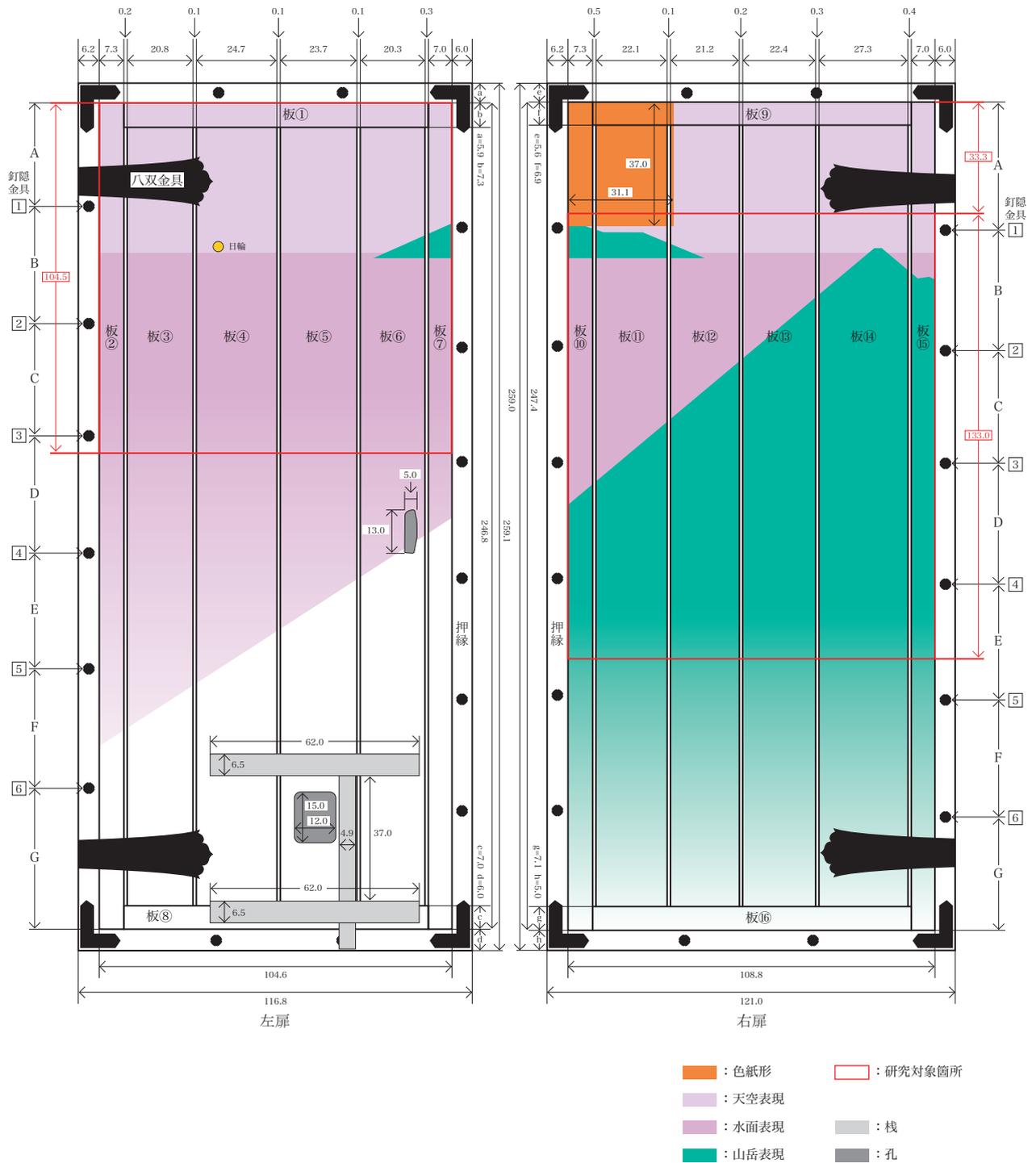


図2 日想観図 実測図

本研究において画面の箇所を指示するにあたり板および押縁にある釘隠金具に便宜上の番号を付した。左扉上辺框を板①、左框を板②この右隣表板を板③と順に番号を付して下辺框を板⑧とした。右扉は上辺框を板⑨、左框を板⑩この右隣表板を板⑪と同様に順番号を付し、下辺框を板⑬とした。釘隠金具は押縁縦の辺にあるもので、左右どちらの扉も上方から1から6まで番号を付し、さらに押縁上辺から釘隠金具1までの間をA、釘隠金具1から2までの間をBというように間隔にアルファベットの記号を付した。この間隔はAからGまでである。例えば、板4-B中央左には日輪が描かれている。



図3 平成27年10月3日の記事 洛南タイムス社 朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、京都新聞、産経新聞、城南新報などでも紹介された。



図4 現状調査風景 尾廊側から撮影した取り外される前の西面屏



図5 研究対象作品の檜板と檜板との継目



図6 研究対象作品の継目の詰物

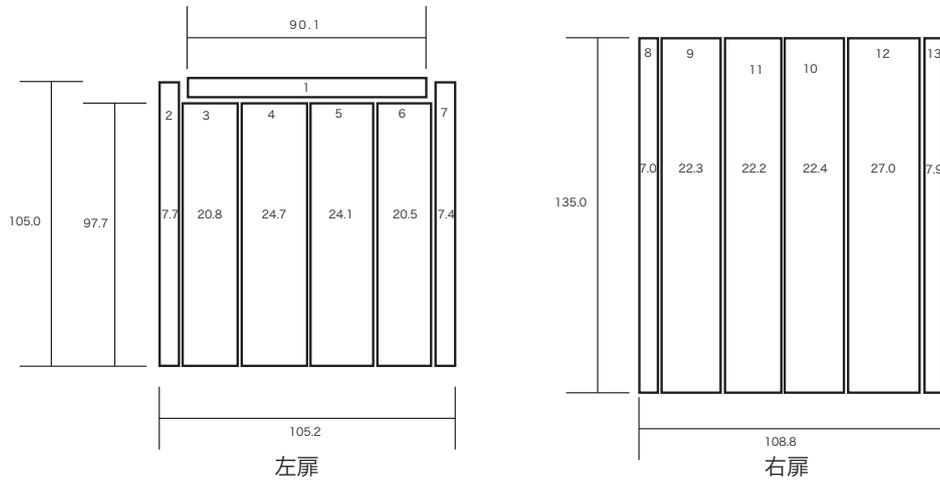


図7 学術的復元模写 基底材 加工寸法表 (単位: cm) 厚3cm



図8 槍鉋で檜板表面を削る



図9 V字の溝



図10 反り防止の枘



図11 基底材裏面 額を取り付けた場合



左扉



右扉

図12 学術的復元模写 基底材 加工完成

目的の遂行に支障ないことがその根拠である。準備した平らな檜板の表面を槍鉋によって削り、研究対象作品と近似した画面を再現した（図8参照）。また、V字の溝も同様に製作した（図9参照）。

檜板の継ぎ方に関して、各檜板の接合面にはズレが生じないように凹凸の加工を施してこれを組み、裏面に木製の楔を打ち込むことで接合の強度を増している。さらに、横方向に柄を差し込むことで、学術的復元模写を制作して行く途中で生じる可能性がある画面の反りを抑える（図10参照）。この柄を差し込む溝の幅は左右で微妙に異なっており、柄を溝の幅の広い方から狭い方へと差し込むことで檜板と檜板とがより強く締め付けられて分解を防ぐ効果も得られる。柄の本数は右扉用の基底材には4本、左扉用の基底材には3本である。この柄は額縁を取り付ける際にも使用する構造である（図11参照）。

この檜板の継ぎ方は研究対象作品とは異なり学術的復元模写独自のものである。研究対象作品の檜板は並べて和釘で止めていると考えられるが、学術的復元模写では学術的復元図に影響を及ぼす可能性の高い釘は使用しないこととした（図12参照）。次の工程では、V字の溝に木屎漆を埋める。

## 註

- 1 本研究は平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C) (17500693) 及び、金沢美術工芸大学教員奨励研究(平成17~20年度)の研究助成を受けた成果の一部である。
- 2 本論で研究対象作品の特定の部分を示す時は、「図2」の記述に従う。
- 3 荒木恵信：「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」の学術的復元模写による保存に関する研究、鳳翔学叢 第6号 67~107ページ (2010)  
荒木恵信：「国宝 平等院鳳凰堂内 西面扉絵 日想観」の学術的復元模写による保存に関する研究(二)、鳳翔学叢 第8号 132~171ページ (2012)
- 4 「図2」に示す赤枠内参照。

## 謝辞

本研究にあたりまして多大なご協力とご指導を賜りました宗教法人平等院、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、建築文化財修復師 西田守男氏、その他関係者の方々に深く感謝申し上げます。

(あらかき・けいしん 日本画専攻／文化財保存学)